



愛の精神

はんぶんこの福祉

社会福祉法人さがみ愛育会
〒252-0206

相模原市中央区淵野辺 1-16-5 愛の園ふちのべこども園内 4F 法人本部

TEL 042-707-8881 FAX 042-707-8882

ホームページ <http://www.aiikukai.or.jp> Eメール info@aiikukai.or.jp

(編集発行人 小林祐子)



松岡俊彦：「ふーちゃん」

ふーちゃん：「なーに」

松岡俊彦：「あのね」

ふーちゃん：「うん」

松岡俊彦：「ふーちゃんはいくつ？」

ふーちゃん：「五つ」

松岡俊彦：「五つにしては
ずいぶん、小さいのね」

ふーちゃん：「小さいのね～」

松岡俊彦：「どうして小さいし、
なんで可愛い声なのかい？」

ふーちゃん：「それは…にんぎょうだから～」

松岡俊彦：「ふーちゃんはどここの保育園なの？」

ふーちゃん：「おにんぎょう保育園だよ」

目を閉じれば、松岡俊彦会長と相棒のふーちゃんのやりとりが浮かんできます。その眼差しはいつでも優しく口元はつねにほほえみを絶やさない姿でした。

初代理事長松岡キンが亡くなり、理事長を引き継ぐ前後から、天性のリーダーシップで新しい保育を推進しました。全国に先駆け地域子育て支援や、休日保育を始めたことで毎日朝6時には業務を開始し、日曜日でさえも責任者として業務を行う、盆と正月以外はまさしく毎日仕事と格闘している姿が思い起こされます。その結果として数十年分の著作原稿、多くの施設、法人本部体制、あらゆる分野への人脈、淵野辺保育園（当時）、中目黒駅前保育園で築き上げた優秀な保育士等の専門職集団を育て上げました。

それはまるで副園長時代に急激に改革を進めようとしたことで初代理事長、松岡キンと衝突したことの贖罪のような思いがあったのかもしれませんが。「人は一生成長する」…人を育てたり、人を援助する仕事をしながら改めてそれを感じました。人には限りない可能性と未来があるということを知り、私たちはこれからも子育てや介護、障害者支援に携わっていきたいと思います。

(総合施設長 松岡 潤)

会長を思う

はんぶんこの愛の道を生きた人 永遠に

82年間の生涯

令和3年12月22日午前10時15分、伊豆長岡の病院にて静かに目を閉じました。

それは壮絶な人生から解放された安らかなきれいな顔でした。妹である私が言うのもおかしいですが、若い頃は父親似の端正な顔立ちでしたが、晩年は長年の信念に基づく思いが深く刻み込まれた威厳のある容貌でした。最後は痛みや苦しきから解放されすっかり神様に身も心も委ねた安らかで穏やかで優しい顔で逝った。

「はんぶんこの福祉」の情報誌の創刊号から論説を書き、行政への提言、福祉施設の在り方、当法人の改革等を様々な面を考察し、実践、研究し、着手することで児童福祉の施策や法人の質の向上に多大な功績を残し、まだまだやるべき構想を抱えながらの旅立ちになりました。

1か月間の闘病で必ず回復するとの願いは届きませんでした。ライフワークの一環である海釣りでの事故だったことはちょっと気持ちがほっとする思いです。

会長が改革の取り組んだ福祉事業

改革については、この誌面で何度も取り上げてきましたので、エピソード等を記述することに致します。
☆小さい時からやんちゃでした。

昭和14年に東京葛飾で生を受けた会長は牧師の父と賀川豊彦氏の薫陶を得、その指示で父と共に幼児園を運営していた母(初代理事長)の元で共に成長しました。大きなエプロン姿の会長は、幼い時から年上の園児さんと仲間取りで悪戯時代を過ごしたのです。東京空襲等戦局が激しくなり、母の故郷小豆島に疎開、戦後昭和20年に父の新たな勤務先の開校したばかりの成城学園高校(兵器学校跡地)現麻布大学に家族で移住をしましたが、父はすぐに結核で死去、妹との母子家庭になったのです。静かに目を閉じている父の亡骸の枕元で、母は一晩中神に祈



(前列、左から6番目が幼少期の松岡俊彦)

り朝を迎えた時に、窓越しで数人の子等の釘拾いの姿を見て、この子達の居場所・保育園の創り上げが神からの使命であると心し、知らない町での余所者扱いで辛苦を重ねながら開園に至りました。兄は多忙な母に代わり、私の面倒を見ながらも、学童期は親分肌で常に数人の仲間を連れ、色々な遊びのリーダーでした。いつもくっついていて私も仲間として母艦水雷等の遊びや戦時中は兵器学校だった建物にあつた色々な機械の部品の残骸を使つての遊びに明け暮れ、辺り一面何も無い草木が生い茂る淵野辺の町を駆け回っていました。父は温厚な人柄でしたが、母は一見静かですが、芯が強くて激しい思いの人でした。中学の時に漫画を持って登校した兄が先生からびんたされました。本を取り上げられたことに対し、母が先生に談判。(当時は先生が手をあげることも当たり前でしたし、逆らうことは余程の事でした)母の静かで強い口調で「殴ってもいいが本は返しなさい」と説教する迫力を真のあたりに見て、兄は自分もあのよう



☆福祉への歩み

校は有名6大学付属校に進学、学力優秀で特待生となり在学中は授業料、大学入学金免除と親孝行していました。大学ではバレーボール部で9人制のレシーバーで全日本選手権等の大活躍、その後大手の有名楽器会社に就職、その頃はオルガンのセールスマンとして各地に出かけ、常にトップの売り上げを誇り、低迷している仲間成績を分ける等友達思いの人でした。

2年程してから母親の仕事への思いを持ち、日本社会事業大学研究科に進み、卒業後は神奈川県児童福祉課、青少年センター指導部に勤務、現場で対人での業務から、プログラムやワークの作成等様々な対人関係のスキルも学び、その後の民生部児童課に異動し児童福祉の業務の日々でした。現在、当法人理事で法人の運営に貴重な提言をして下さる伊東和夫さんはこの時代の同僚です。そして将来の伴侶となる世津子さんに出会いま



した。絵画はプロ並みの世津子さんへの思いは生涯ずっと変わらなかったことは誰もが認めるほどであった。その後は児童相談所に異動、児童福祉司の勤務を通して、里親制度の普及に県内を動き回り、誰もが笑顔になる福祉への心を深めていきました。

☆さがみ愛育会に入る

昭和44年にすこやか保育園の開所に当たり、その当時は特に保母不足の為に苦慮していたところ、相模原市の当時の児童福祉課から紹介の方が関西から就職してきまし



た。その方は1年程してから若き職員を説得し組合を作りオルグ活動でいろいろな所と繋がっていきました。昭和46年法人内の対処の為に県を退職、園長に就任しました。大手の会社の労働組合から幹部が数人来ての苦しく厳しい団交が始まりました。しかし開園して間もない園に蓄えもなく、要求する内容が何も無いと判断したのでしょう。2年ほどで他会社の組合幹部は手を引き、園内の組合も自然に消滅、先頭に立っていた職員も自ら退職し治まりました。

☆測野辺保育園での魅力的な保育から園長、理事長として会長へ

その後10年程園長を務め、活気の溢れる保育展開や行事の際にはおもしろい仮装でのパフォーマンス等で、皆を沸かせました。そして、測野辺保育園に副園長として異動、保育士として新しき保育を目指し保育改革を展開、昭和62年に園長就任、通常の保育からの観点を抜け、地域の貢献、子育て支援として、今は殆どの園で行っている一時保育事業、地域子育て支援の取り組み、夜間保育、病後児保育等と先駆的な事業展開で全国に測野辺保育園が注目され、厚労省の官僚等からも実践提言者としての意見を求められる存在になっていきました。平成7年には理事長に就任し、平成22年に東京都の目黒区指定管理の中目黒駅前保育園の園長に就任する等各園長を歴任し、都の規定で理事長から会長になりました。

昭和23年創立の測野辺保育園が昭和34年法人立となり、ニーズに応じた施設が増える中で、法人本部を統括、ガバナンス体制を明確化する



るなど法人本部機構の構築をするうえでいくつもの法人事業を企画実践してきま

した。会長は保育界の中で力を発揮しましたが、

本人は華美を嫌い、地道に福祉の道を進んでいました。そして何より人との出会いを大切に多数の方と深い親交を重ねてきました。

☆潮の香りがいっぱい伊東に拠点を構える

中目黒の園長を辞してからは念願のログハウスの家を建て本格的に伊東に移住しました。

少しゆっくりすると思いきや、頻りにメールでの業務指示、そして月数回にわたり相模原との往復、それは平成28年の肺癌の手術、令和元年の閉塞性動脈硬化症で壊死した左足指を切り落とす大手術で車椅子生活と誰もが思う程でしたが、杖を突き歩行訓練を重ね、その状態でも伊東から相模原へのマイカー通勤は従来通りで業務に当たっていました。

ログハウスの家は伊豆大島等が一望出来る高台にあり温泉もある心地良い家です。そこでは、法人内の若手職員の育



成を図るための赤沢自然塾を開講する等皆が集える場所として有効利用の場に開放をしていました。☆釣りは最高の癒しであり生き様でした。

赤沢移住は大好きな魚釣りもすぐ楽しめる環境が何よりの場所だったので。釣りの原点は高校、大学そして就職先も一緒だった親友の釣具屋開店です。法人設立当時に理事を引き受けて頂いていた友人で互いに支え合う存在でもありました。その方の勧めもあり会長の釣りへのめりこみの人生が始まりました。ライフワークともいえる釣りは何事もプロ並み迄習得する会長ですから、大きな獲物を釣って皆にふるまったり、大きな水槽を園に設置し毎週のように海に行き、魚と共に海水を運んで来る等破天荒な園長でもあり、人生最後迄やんちゃで釣りを楽しんだ会長でした。



☆クリスマスチャンとして生きる

中目黒時代に新聞に愛の園幼児園の園児だった方の投稿を偶然見つけたのです。その方を訪ね、父母の足跡を辿る日々で賀川豊彦先生

の雲柱舎にも赴き、戒能牧師との出会いから当時の園の様子、賀川豊彦先生の奥様である賀川ハルさんと共に保育をしたこと等が次々明らかになり、そこにはキリスト教の精神が根底にある事も深く理解出来たのです。幼い時から身体に流れているキリスト教に目覚め、父母と同じ道に進み、平成28年に伊東教会で受洗し、神を信じ、周りの人を心からの愛の言動で包んでいました。

☆会長が消えてしまいました。が。。

会長が目の前から急に消えてしまいました。茫然とする数日でしたが、今まで会長が我々に言い続けたことが多くあるのです。福祉の在り方、未来に向かい、留まることなく、常にやるべきことを見つけて、法人内20施設、愛溢るる福祉の道を進んでいき、天国でハラハラしている会長が何時か安心出来る笑顔で見守って貰えるように尽力して参ります。法人役員の皆様の厳しくも温かなご指導の下に行政の方々、法人内施設を利用し関わりのある多数の方、地域の方々等の多方面、多数の皆様からのご意見やご指導を力にして参ります。そして会長の娘、息子の3人は法人の支柱となり、法人事業の原動力として活躍しています。会長を失ったさがみ愛育会ですが「愛の精神」の基に「はんぶんこ

の福祉”を目指して法人内職員一同心を合わせて一歩一歩の歩みを着実に進んでいきます。特に若い世代の職員の発想や提言が大きな力になります。丁寧な改革を大切に明るい福祉の未来に光が届けられるように精一杯力を尽くして参ります。

(理事長 小林祐子)

伊東和夫氏は神奈川県庁で、会長の同僚で、長く神奈川県庁の監査課にお勤めになり、社会福祉法人の監査・指導に腕を振るってきました。退職後当法人の理事に就任し、法人の中堅職員の勉強会(未来塾)を立ち上げ多くの現幹部職員を育てました。また、会長とも公私にわたり長くお付き合いいただいています。ここで伊東氏からのメッセージをご紹介します。

松岡俊彦さんを偲んで

松岡俊彦さん 貴方の訃報には驚きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

貴方との出会いは昭和42年のこと、当時神奈川県民生部児童課に異動し、その時貴方が先に着任されており、共に児童養護施設や障害児施設の支援に汗を流し、同じ釜の飯を食いながら仕事をすることがなつかしく思い出されます。貴方が県職員として特に力を発揮されたのが、児童

相談所の児童福祉司の業務でしょう。親からの子どもに対する各種相談や保護に尽力され、上司からも評価されていきました。昭和46年、謹先生と共に法人の仕事に専念するため、惜しまれつつ県を退職されたところで

貴方の法人における業績は紹介済みなので省略しますが、相模原市や神奈川県さらには厚生省の各種委員会のメンバーとして、日本の福祉事業の向上に寄与されてきたことについては、大いなる功績として記しておきます。

平成23年秋の叙勲では、これまでの業績が評価されその栄に浴されました。職員の皆さんにより、世津子夫人とともに祝福を受けておられたことがなつかしく思い出されます。

貴方の数々の業績のなかで私が最も評価したいのは職員の育成のため力を注いでこられたことです。このための予算を惜しまず、その機会を与え、職員の皆さんもそれに取り組んでこられました。「組織は人なり」組織が発展するには優秀な職員が必要となります。現在600人の職員がそれぞれ力を発揮され、この力が総合力としてすばらしい地域福祉の向上に貢献されていることでしょう。

貴方の敷かれたレールは、後進の皆さんがしっかりと歩んでいます。今世紀のど真ん中、法人100周年を迎えます。我が国は更なる超高齢化社

会となるため、現在の事業の見直しや、新たな分野への進出も社会的に期待されることでしょう。彼らはこの変化に対応する力量があると思います。どうぞ天国から見守ってあげてください。

(理事 伊東和夫)

経歴

1939年4月8日	生誕
1962年3月	法政大学経済学部卒
1964年3月	日本社会事業大学研究科卒
1964年4月	神奈川県職員・青少年センター指導部
1967年4月	同民生部児童課
1968年10月	唐戸世津子と結婚(28歳)
1969年4月	神奈川県相模原児童相談所(児童福祉司)
1971年4月	社会福祉法人さがみ愛育会すこやか保育園園長
1982年4月	同法人渕野辺保育園副園長
1987年4月	同法人渕野辺保育園園長
1997年7月	同法人理事長
2010年4月	同法人理事長を辞し、目黒区立中目黒駅前保育園園長
2012年3月	同法人名誉会長
2013年4月	目黒区立中目黒駅前保育園園長を辞職
2011年11月	同法人総合施設長
2016年3月	双光瑞宝章受章
2021年12月22日	受洗(日本基督教団) 死去(享年82歳)

会長 松岡俊彦の訃報のお知らせをさせていただきましたところ、多くの皆様よりお便りをいただきました。ここで一部、ご紹介をさせていただきます。

俊彦先生との思いは尽きませんが、いつも先生の熱い情熱とお優しいお人柄は私の憧れで足下にも及びませんが、自分も少しでも子供たちの為にお手伝いできることができればと考えることにも繋がっていきました。俊彦先生から学ばせて頂いたことが、今日の自分のあり様に繋がりました。感謝の気持ちでいっぱいです。

我が家の息子達も園長先生から教えて頂いた様々な精神を今も持ち続けていると確信しております。

いくらお礼を述べても足りません。ありが

とうございました。まだまだ学ばせて頂かなければいけない未熟者ですが俊彦先生のお教を胸に、努力していこうと考えております

児童発達支援センター
バンビ所長

田中多輝子様



僕は瀏野辺保育園に入園して園長さんに出会

い、卒園後の今もずっと、園長さんの大きな愛に包まれ育ててもらっています。ありがとうございます。

卒園後、辛いことの連続でしたが、僕は心の中で園長さんの言葉、僕にして下さったこと、そしていつも僕を愛してくれていると思い、ぐっと踏ん張りました。

僕がこうして無事に20歳を迎えられ、今、頑張れているのも園長さんがいて下さったからです。

だから、今の僕を園長さんに絶対に見せに行きます。

卒園児 杉本泰旭様

※このメッセージは、会長の誕生日に寄せて下さったものです。

俊彦先生が小学6年生になられた新学期に私は瀏野辺保育園に就職し、住み込みで一緒に生活しながらだりあ組の保母として働かせて頂きました。

それ以来、七十有余年に亘りおつきあいさせて頂きましたことを厚く御礼申し上げます。

俊彦先生は、お母様の創設されたさがみ愛育会の後を継ぎ、施設、法人を大きく発展されたばかりではなく、保育界における第一人者として、実践家、理論家としてその名を知らない人はないほどご立派な指導者でいらっしゃいました。

到底及ぶ人はなく惜しまれてなりません。

私もこれからゆっくりと昔話をさせて頂きたいと楽しみに願っておりました矢先のことと、喪失感この上ないものがございます。

元川崎市保育課長 手塚友子様

松岡先生

おハガキ頂きびっくりしました。

保育園の時、剣道、竹馬、スケート、チャレンジ坂など思い出します。

どうもありがとうございました。

天国で見守って下さい。

さようなら

卒園児 遠藤弘樹様

私にとっては、今でも前園舎の瀏野辺保育園の園長さんのままで、何を思い出しても涙が止まりません。

職員の中では、もちろん一目も二目も置かれる存在でしたが、私にとってもそうであることに変わりありませんでしたが、普段は全く恐くもなく緊張もしませんでした。

園長さんは、本当にすごい方なのに、それを感じさせないというか…。特に秀でたものがない私をなぜか認めて下さり、本当にたくさんのご経験させて頂き、何でも自由にさせて頂き、そして今の私があります。

瀏野辺保育の職員として園長さんと過ごさせて頂いた時間は、これからもずっと私の誇りです。期待も込めて私のことをみて下さっていたこと、そして単純に本当に本当にかわいがって頂いたこと、嬉しかったし、楽しかったし、感謝しかありません。

旧職員 山本 歩様

松岡俊彦先生 ありがとうございました

理事 櫻井慶一

この原稿の執筆のご依頼をいただいたのは、とても悲しい衝撃的なご連絡と同時でした。それは松岡俊彦先生が暮れに急にお亡くなりになったというご報告です。

私は昨年の6月に理事に選任された者ですが、これからは先生のそばで一緒に仕事をさせていただけるという喜びと、保育界のレジェンドのいらっしゃる法人の理事に選任されたことに重い責任を感じていた矢先でした。

私が初めて先生にお目にかかったのは、30年ぐらい前の全国保育士養成協議会の研修大会の席でした。当時、私は新潟県の小さな短期大学の幼児教育科の教員でした。色々な雑誌で有名な松岡先生の実践されている「地域子育て支援事業」等の先駆性に感動し、実際に先生のお顔を拝見したいという気持ちもあり、壇上のシンポジストの先生のお話に耳を傾けました。

それ以来、保育所の第三者評価事業や私の研究フィールドの一つでもある夜間保育園関係の仕事などでも何度かご一緒させていただきました。そうした時いつも情熱家（ロマンチスト）であり、だれに対しても変わらない謙虚さや、ニコッとされた時の何とも言えない無邪気な暖かさが魅力的な大先生でした。

今はただ深い悲しみに覆われていますが、これから先、微力ですが法人理事としての役割を先生に認めていただけるように頑張ります。先生、長い間本当にありがとうございました。

キリストの教えと福祉 その④

我が法人の創設者「松岡キン」は、神学者“賀川豊彦”から受洗したキリスト者でした。そこで現法人理事の「伊藤忠彦」牧師による“神の教えと福祉について”の解説をお願い致しました。

旧約聖書のレビ記には「あなたのブドウ畑に落ちた実を拾ってはならない。貧しい者と寄留者（旅人）の為に、これを残しておかなければならない。（レビ記15節）と述べられています。

この教えに福祉の教え、心が盛られています。聖書の書かれた時代には、特に、貧しい人々、また、たえず食料を求めて、流浪の生活をよぎなくされる者もいたでしょう。

また、住まいはあっても、食べることに、困難を日々覚えている人もいたに違いありません。

主なる神は、このような貧しい者と寄留者の為に、これを残しておかなければならないと語られているのです。



理事・牧師 伊藤忠彦



編集後記

法人の情報誌も20号になりました。

情報誌のお手伝いをさせていただいてからいろんな方と出会い、情報誌を作っていました。いつも会長さんが最前線で保育や福祉の情報を教えて下さりました。

突然の知らせに驚きと共に、今までの会長さんとの思い出がフラッシュバックされました。

私が独身の時は、子どもたちのキャンプで滝と一緒に打たれたり、剣道保育では試合をしたり、車初心者の私に運転の仕方を教えてくれましたね。

また、杖をつきながら「ゆきちゃん」と私の勤めている園にも何度も足を運んでいただきました。

今でも信じられなく、ひょっこりお顔を見せにいらしゃるような気がします。

ご冥福をお祈り申し上げます。

編集担当 笹谷有希